



本の紹介～『海に見える家』『海に見える家 それから』

はらだみずき 小学館文庫(2017. 2020)～

そろそろ前期も残り少なくなってきましたね。コロナ禍、オンライン授業も続いています。いかがお過ごしでしょうか？

皆さんが読まれたらどんな感想を持たれるかなと思った本があったので、ご紹介したいと思います。季節的にも合っているのではないかと思います。

主人公は社会人一年目の男性です。苦労した末、入社した会社を1ヶ月で辞めるところから始まります。退社後まもなく、知らない男性から連絡が入り、疎遠になっていた父が亡くなったことを聞かされました。仕事もないし仕方なく、遺された父の家の整理を始めると、連絡してくれた男性と出会い、生前の父の生活を知っていくことになります。自分の部屋に戻らず父の家での生活を始めてみました。一年後を描いた続編『海に見える家 それから』では、元カノに「あなたは田舎に逃げたに過ぎない。楽な道を選んだだけ」とメールで言われてしまい、この言葉は主人公の気持ちに刺さっていきました。慣れない田舎での生活は、現金を稼いだり食料を調達したり、と厳しい生活で、決して楽には見えませんが…。主人公は“海に見える家”での生活を通して、自分にとって働くとはどういうことか？人生にとって大事なものは何だろうか？ということを見つめていくことになりました。



と書きながら、自分が学生だったとして、この紹介文や文庫本のカバー等を読んで、この本を読んでみるだろうか？とふと考えました。う～ん、読まないかな？！どうだろう、読んだとしてもぴんとこないかも？！ぴんとこないにしても、どこかで記憶に残り、何かに行き詰った時に、あんな生き方をしていた物語があったなと、うっすら思い出せたらいいのかもしれない。選択肢は一つでなくいろいろあると思えるようであったら、少しはその行き詰まり感も和らぐかもしれないです。

違う見方をすれば、この本は亡くなった父との喪の作業であり、父との和解の物語でもあります。また組織に所属するのではなく、自分のやりやすい方法で生活していく姿を描いたものでもあります。こんなふうにはやっていけるなら、他でも充分やって行けそうに思いますが、主人公にとっては父との別れが大きな意味を持っていたのかもしれない。さらには、両親の離婚により、離れて暮らす母とのことはそのままになっていて、そのお話もあつたら読んでみたいと思わせます(紹介文に登場しませんが、物語には姉も関わっています)。

主人公に「たくましいね！」と声を掛けたら、「何となく結果こうなっただけでー」と、頭をかきながら笑って言いそうです。読後、こんなふうには想像できるくらい、いきいきとしていて、何となく気持ちが明るくなる物語です。